

「二〇一一年三月十一日」は、将来日本人の思考態度、精神構造、そして日常生活の倫理や価値観が大きく変わる契機になった日と記憶され、記録されるであろう。

この日から、私はすべての約束をキャンセルし、家に閉じこもってメディアの情報に接してきた。東北地方の太平洋岸を襲う津波を画像で見て言葉を失い、これが現実なのかとその光景に感情や思考を合わせるのに必死になった。こんなことは初めてなのだが、北京から中国人、ニューヨークのアメリカ人、今はドイツに住むアメリカ人の友人たちから、相次いで電話やメールが入った。ドイツに住むアメリカ人は、私と同年代でベトナム戦争の体験者だが、自分は今まであらゆる悲しみを見聞してきたのでそれを慰める言葉をもっている、しかし今テレビで見た日本の津波はこれまでの

慰めの言葉を越えている、私にできることは何かと訊ねてきた。北京の中国人からは放射能が東京に及ぶようだが、家族を連れて北京に避難してはどうか、住む所はすぐにさがす、となんとか電話をもらった。

私自身、このようなメッセージに驚きながら、この津波で失われた人命の数にただただ茫然としていた。この天災と原子力発電所の「人災」に接しつつこれからの日本人の基本的な姿勢は歴史的変化をとげるだろうと予見した。第一は、百分の安全などありえない、つまり絶対的価値観への恐怖である。第二は、今この瞬間確かめている現実など実にあっさりと崩壊するのだとの恐怖である。第三は、自然は美と残酷が表裏になっているとの恐怖である。この三点の恐怖をとおして浮かびあがることは何か。

合理的発想の言、人智の限界を忘れた思

考を虚心に見つめ直し、「現代の文明」そのものを根本から問い直さなければならぬということだ。

関東大震災の折り、作家の正宗白鳥がみじくも、「数分間の大地の震動のために、文化的設備がすべて壊されて、汽車も不通、電灯も点かなくなったことを思ふと、人間が何千年で築いた文明の力の薄弱なことがつくづく感ぜられました」（婦人公論大正12年10月号）と述懐したが、八十八年前のこの言は今なお有効であることを自覚する必要がある。

そして私はもう一点震災遺児たちに思いを馳せる。私の父は横浜で関東大震災に会い、祖父を始め一族を喪った。医師であった祖父の遺体はとうとう発見されなかった。父の精神の孤独な人生を見て震災遺児の心理的ケアは社会全体の責務とも考える。